様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：４３９０７
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１３１９６

研究課題名（和文）デンマークの0年生におけるケアから学習への移行ープリスクールクラスモデルの提案

研究課題名（英文）Transition from care to learning in Danish 0th grade-Proposal of a preschool class model

研究代表者
児玉　珠美（kodama, tamami）

愛知学泉短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：７０３５２８７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、デンマークの0年生における「ケアから教育への移行」の内容をカリキュラム研究及び教育現場の実態調査を通して明らかにし、プリスクールクラスのひとつのモデルとして提案した。研究成果としては、平成27年日本保育学会、日本比較教育学会等における発表、平成28年「デンマークのフリスコーレの授業に関する一考察」（早稲田大学教育学会紀要第17号）、平成29年「デンマークの幼小移行期『0学年』に関する考察ー言語評価プログラムに焦点を当ててー」（愛知学泉短期大学研究紀要1巻第2号）等の論文、さらに著書『デンマークの教育を支える声の文化ーオラリティに根差した教育理念』（新評論）等に研究成果をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
幼小移行として、ケアから学習教育への移行プログラムを実施していくデンマークモデルが確立していく段階を、フィールドワークを中心に長期的に参与観察を通して実証研究していく点に、本研究の学術的な特色があると考えられる。また、教育現場における課題検証を通して、実現性の高い幼小移行モデルを提示することが可能となるという点に本研究の意義が認められる。ソーシャルペダゴジーは日本の保育理念と共通点も多く、日本の幼小移行のあり方への大きな示唆となり得る。幼小移行に関する政策及びカリキュラムレベル、教育現場レベルでの3年間に及ぶ調査研究は他に例のない研究である。この点に本研究の斬新さと挑戦性があったといえる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I clarified the contents of transition from 'care to education'in the 0th grade in Denmark through curriculum research and fact-finding in the field of education, and proposed it as a model of pre-school class. The research results are presented at some conference, Japan Child Care Society, the Japan Comparative Education Society, etc,. "One consideration about the class of Friskole in Denmark" ,Waseda University Educational Society Proceedings No.17,(2017), "Denmark a study on early childhood transition period "the 0th grade" -focusing on the language evaluation program-",Aichi Gakusen Junior College Research Bulletin Vol. 1 No. 2(2018), etc., presented as a paper. The research results are summarized in "Cultural of Orality Supporting Danish Education"(2017,Shinhyouron)

研究分野：教育学

キーワード：デンマークの保育と教育　プリスクールクラス　幼小移行期　ケアと教育

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

挑戦的萌芽研究　（平成 27 年度～29 年度）
「デンマークの 0 年生におけるケアから学習への移行―プリスクールクラスモデルの提案」
研究成果報告書

研究課題の「デンマークの 0 年生におけるケアから学習への移行―プリスクールクラスモデルの提案」では 0 年生という表記がなされているが、教育課程においては 0 学年という表記が正しい。本報告書においては 0 学年の表記で統一している。

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の学術的背景

保育・幼児教育　（ECEC・Early Childhood Education and Care）　改革の主要テーマとして現在国際的に掲げられているのは、OECD の Starting Strong（2006）　にも報告されているように、子どもの発達を学びの視点で捉え直すという乳幼児の「学び」の探究である。そのためには「一体化された学びへのアプローチ　」が必要であり、ECEC　と学校の両方の体制において、行政・養成・規定・カリキュラム等を横断する橋を構築するためのより大きなフォーカス」（OECD,2006）　が求められている　。イギリスをはじめ多くの国が幼小移行期の学びの保障のために取り組んできたが、現場における様々な問題と課題を抱えている　（Van, Jan, Michel,2012）。

デンマークでは、ケア・養育・学習を相互にヒエラルキーを付けることなく結び付けて子どもにアプローチしていくソーシャルペダゴジーの伝統が継承されてきた　（Olsen ,2007）が、2012 年、デンマークのプリスクールクラスである 0 学年に、ECEC と初等教育の連続的なカリキュラムとして、3 歳・6 歳の言語評価プログラムを柱とする学習カリキュラムが初めて導入された。生涯学習基盤の強化として実施された 0 学年への学習プログラム導入は概ね成功し、2020 年に向けてさらなる改革が推進されている（EVA デンマーク教育価研究所,2013）。

デンマークのプリスクールクラスである 0 学年において、言語評価プログラムを中心とした学習カリキュラムがどのように導入され、実践されているのか。また、ケアと学習教育のバランスがどう保障されているのか。導入までのプロセスとアクティブテーマ等は、幼小移行のモデルとして、他国にはない独特のモデルとなり得るという点に、本研究の学術的意義があると考えられる。

（２）本研究の学術的な特色

幼小移行として、ケアから学習教育への移行プログラムを実施していくデンマークモデルが確立していく段階を、フィールドワークを中心に長期的に参与観察を通して実証研究していく点に、本研究の学術的な特色があると考えられる。また、教育現場における課題検証を通して、実現性の高い幼小移行モデルを提示することが可能となるという点に、本研究の意義が認められる。

デンマークの幼小移行に関する研究としては、子どもの視点からの研究（Sandberg,2012）、保育と 0 学年の子どもへの影響（Charlotte,2014）、0 学年の実態調査研究（垣内･斉藤,2012）、ペダゴ―の養成校に関する研究　（小谷,2012）8　等があるが、移行に向けての政策レベルからカリキュラム、さらには現場の実態を包括的に研究しているものは管見の限り見当たらない。筆者は 2011 年から 3 回に渡り、デンマークの公立学校の参与調査を実施し、グルントヴィの伝統的なデンマークの教育理念　（Borisy,1991;Korsgaard,1997）の影響について明らかにしてきた（児玉,2013）。本研究は、ソーシャルペダゴジーの伝統が継承されているデンマークの ECEC と初等教育を接続させるための 0 学年が、学習カリキュラム導入をするにあたり、準備段階から実施スタート、さらには導入経過に至る全過程をリアルタイムで実証研究することが可能となる貴重な機会となった。さらに、2014 年からの公立学校改革も加わり、2012 年から参与調査を実施している公立学校の 0 学年クラスがどのような変化をしていくのか。その推移を分析検討していくことで、幼小移行期におけるケアと教育のバランス及び移行の問題に応えるプリスクールモデルを提示していくまたとない挑戦の機会となる。

ソーシャルペダゴジーは日本の保育理念と共通点も多く、日本の幼小移行のあり方への大きな示唆となり得る。幼小移行に関する政策及びカリキュラムレベル、教育現場レベルでの 3 年間に及ぶ調査研究は他に例のない研究である。この点に本研究の斬新さと挑戦性があるといえる。

２．研究の目的

本研究の目的は、デンマークのプリスクールクラスである 0 学年において、ケアから教育への移行がどのようにカリキュラムデザインされているのか、担任であるペダゴー　（社会的教育

指導者・日本における保育者に相当） はケアと教育のバランスをどう構築しているのかを、デンマークの 0 学年の教育の概要研究及び教育現場の実態調査を通して明らかにし、デンマークの 0 学年を幼小移行期のプリスクールクラスの具体的なモデルとして提案することである。デンマークで 2012 年以降推進されている学校改革の重点目標である 0 学年の改革内容に関する包括的研究は、今後の日本の幼小移行期の在り方に関する研究への新たな示唆となり得ると考えられる。現在、2020 年に向けて教育改革を推進しているデンマークモデルが、日本の幼小移行に関する研究への新たな視点となることを目指した。

３．研究の方法

（１）研究経過

本研究は 4 年間（延長 1 年間含む）に渡って実施した。平成 27 年度前期には、デンマーク ECEC と初等教育の制度史における 0 学年発足までの経緯、幼小移行プログラムの概要及びカリキュラムに関して参考資料を中心に整理、考察した。後期には第一次実態調査として、公立学校 2 校の 0 学年の授業の参与観察調査及び関係者への面接調査を実施し、教育現場における新たなカリキュラムの遂行状態を把握し、考察した。半年後に現場調査を実施し、ケアから学習教育の移行の実態調査を実施した。平成 28 年度に計画していた 0 学年クラス担当のペダゴー養成校 （Professions Højskole） への参与観察調査と面接調査を実施に関しては、簡単な聞き取りのみに終わってしまい、成果を出すことができなかった。また、デンマーク教育評価研究所へのインタビュー調査についてもコーディネートが順調に進まず、実施することができなかったが、私立学校の 0 学年の授業の視察及び教員へのインタビューが可能となった。

平成 29 年度は家庭の事情もあり、研究時間を確保することができず、1 年間の研究延長申請をした。平成 30 年に最後のデンマーク訪問を実施し、これまで研究協力をして下さった学校に研究成果報告を兼ねて、御礼の旨を伝えることができた。帰国後、報告書作成に向けて研究成果のまとめ等の作業を実施した。

（２）各研究期間における研究方法

■平成２７（２０１５）年度　以前における研究

平成 23（2011)年 8 月に、デンマークの森の幼稚園等の訪問に加え、グルントヴィの教員養成校を公立学校 2 校を視察した。その後、2013 年の 8 月に、本研究の協力校であるウタスレウ公立学校を訪問視察し、授業の参与観察を実施した。さらに、2014 年 3 月には、同じく研究協力校であるウタスレウ公立学校を視察し、授業等の参与観察を実施した。これらの研究活動は、本研究の成果の基盤となっている。

■平成２７（２０１５）年度

①幼小移行プログラムの概要の整理・分析　【資料・文献調査】

デンマークにおける ECEC と初等教育の関連についても歴史的な経緯を整理し、0 学年発足までの経緯に関して参考資料を中心に明らかにした。また 0 学年発足までの移行プログラムの概要とカリキュラムをデンマーク教育評価委員会のオープンアクセス資料及び刊行資料を中心に整理した。

「本研究の学術的な特色」において前述したように、デンマークにおいては、ケア・養育・学習のバランスを保持しながら子どもにアプローチしていくソーシャルペダゴジーが、ECEC の基本理念として継承されてきた。0 学年改革の中、新たに導入された学習カリキュラムとケアのバランスはどのように保障されているのか、またケアから学習カリキュラムへの移行を具体的にどのように進めていくのか。これらの問題について、デンマーク教育評価研究所の資料を通して考察した。参考文献及び参考資料の研究は、27 年以降も継続的に実施した。

② 公立学校における０学年の実態調査　【参与観察及びインタビュー調査】

教育現場における 0 学年の参与観察調査をした。対象となる学校は、公立学校であるウタスレウ学校 （Utterslev Skole）である。さらに、1 学年の教員との連携等について、担当教員への聞き取り調査を実施した。対象校は、ウタスレウ学校とヴァレンスベック学校 （Vallensbæk Skole）である。

2014 年から本格的に始まった学校改革の中で、0 学年がどのように変化しているのか、学習カリキュラムが導入された 0 学年において、ケアの視点はどう組み込まれているのか等について、 0 学年の授業及び自由時間等の参与調査を通じて考察した。参与調査手段として、ビデオ撮影及び写真撮影を行った。

研究計画では、学習カリキュラムを日本の保育者に該当するペダゴーが担当することについ

て、どのような方法で対応しているのか、研修プログラムや問題点についてコペンハーゲン市内の公立学校 0 学年担当者へのアンケート調査を実施する予定であったが、準備不足のため実施することができなかった。
　デンマークの前期中等教育段階までのすべての学校には、学童保育スペースが確保されており、学童担当のペダゴーと 0 学年担当のペダゴーとの連携について聞き取り調査を実施した。

■平成２８（２０１６）年度
①私立学校における０学年の実態調査【参与観察及びインタビュー調査】・ペダゴ－養成校視察
　学校改革の中、学習カリキュラムや評価について、自由な在り方を重視する私立学校フリスコーレ（Friskole）における 0 学年の実態についての調査を実施した。対象学校は、フレデリスクベア・フリスコーレである。
　さらに、公立学校 0 学年に担当者であるペダゴーの養成校 UCC（Professions Højskole ）の視察訪問を実施した。デンマークのペダゴーは、乳幼児期施設、0 学年クラス、学校外サービス（学童保育）、居住看護施設、特別なケアと支援を必要とする人のための施設等が職域となっている。養成校が 0 学年の学習カリキュラムにどのように対応しているかという点に関して、養成校教員のインタビュー及び授業等への参与調査を計画していたが、学生たちが実習中とのことで、短時間の視察のみとなってしまった。

■平成２９（２０１７）年度
①幼小移行プログラムの概要の整理・分析　【資料・文献調査】
　幼小移行プログラムについて、0 学年における言語評価を中心に資料をまとめ、考察した。

■平成３０年度
①研究協力学校への御礼訪問等
　これまで授業視察やインタビュー等を実施した学校への御礼のための訪問を実施した。研究成果としてまとめた著書『デンマークの教育を支える「声の文化」声の文化―オラリティに根差した教育理念』を贈呈することができた。日本語のため、本文を解読していただくことはできないことは困難であったが、視察内容を日本国内で発表することができたことを報告した。

②プリスクールクラスとしてのデンマークモデルの検討【まとめと考察】
　文献調査及び現地調査の結果を踏まえ、プリスクールクラスである 0 学年において「ケアから教育への移行」がどのようにカリキュラムデザインされているのか、また担任であるペダゴーがケアと教育のバランスをどう構築しているのかを考察する。学習カリキュラム導入の成果と課題を明らかにし、デンマークモデルとして日本のプリスクールクラス設置に向けての萌芽となるべきモデルとして提案した。

（３）研究計画を遂行するための研究体制

　デンマークにおける調査対象となる公立学校ウタスレウ学校及びヴァレンスベック学校は、2013 年、2014 年に視察訪問しており、教職員との信頼関係もある程度構築されていた。特にウタスレウ学校については、0 学年担当のペダゴー2 名とは面識があり、参与調査に対する協力が得やすい状況であった。0 学年から 3 年生までのリーダーである教員にも面識があり、協力体制は万全であっといえる。また、ヴァレンスベック学校についても校長及び 0 学年、他学年の教員との面識もあり、調査協力が得られる状況にあった。
面接調査等には熟練したデンマーク語力が必要となり、通訳をデンマーク在住の大野睦子氏に依頼した。大野氏は 30 年に渡り、デンマーク総合保育園の園長として勤務後退職、保育専門家としての知見及びデンマークの ECEC に関する情報に関しても詳細を把握している人物である。本研究の現地調査についても大野氏の助言を受けながら計画していった。

（４）人権の保護及び法令等の遵守への対応

　本研究では、教育機関における個人の職務経験や教育経験等の個人情報を開示するという点において、被験者の同意と協力を必要とし、個人情報の取り扱いに配慮を必要とした。またインタビュー調査についても同意が必要であった。インタビュー対象は公立学校 2 校におけるペダゴーと教員 6 人、ペダゴー養成校における教員１人であった。
　調査を実施するにあたっては、調査結果に関し被験者及び被験者の保護者全員に事前に了解を得た。また参与観察を実施する場合も、個人情報の取り扱いには充分に配慮し、写真撮影及びビデオ撮影時には事前に了承を得るとともに、肖像権の確認・保護を怠らないようにした。特に子どもたちの肖像権に関しては、個々の肖像権が侵害されることがないことを教育機関及び保護者に説明し、理解を求めた上で撮影をした。

また、収集したデータや写真等が流出しないように、使用するパソコンやパソコン外部記憶装置は常時ロックをかけ、保全管理には万全を期した。

４．研究成果

本研究は、デンマークのプリスクールクラス 0 学年を政策的な視点、教育の質的視点、プロセス的視点の 3 つの視点から研究することとした。さらに、それらの考察を通して、幼小移行期であるプリスクールクラスのひとつのモデルとして提案していくとした。

前述したように、乳幼児期の教育と保育（ECEC：Early Childhood Education and Care）においては、国際的に「一体化された学びへのアプローチ」が必要であり、「保育サービス機関と学校の両方の体制において、行政・養成・規定・カリキュラム等を横断する橋を構築するためのより大きなフォーカス」が求められている。アメリカ、イギリス、北欧をはじめ、多くの国々において、幼小の橋渡しのための就学前 1 年間のプリスクールクラスの設置がなされてきた。幼小移行期としてのプリスクールクラスの設置については、1 学年への移行をスムースにするためにも、初等教育機関の初年次として位置付けていくことが必要であると考えられる。日本においても、移行のための科目設置等がなされたが、1 年間の移行期としてプリスクールクラスを設置していくことが、すべての子どもたちの幼小移行期を保証していくことに繋がるのではないだろうか。

プリスクールクラスの在り方についても、子ども自身が幼小移行を実現していくために、まわりの大人がどう支えていくべきか、今後さらなる検討が必要である。日本の保育理念は、フィンランド・ノルウェー・デンマーク・ドイツのように、幼児教育を単なる学校への準備という視点で捉えるのではなく、生活や遊びを通して総合的に学んで成長していく時期と捉える生活基盤型（ホリスティック型）考え方である。しかしながら、プリスクールクラスにおいては、生活基盤型のケア中心の視点に、就学準備型の視点を導入していく必要がある。デンマークの 0 学年のカリキュラム改正に関わる動向は、就学準備の導入方法のひとつのモデルとなり得ると考えられる。導入に関しては、ケアの視点と学習の視点を、誰が、どのように保障していくのかということが問題となる。低学年担当教員が保育者資格も有するという国もあるが、日本の養成機関等の状況を考慮すると、0 学年を基本的に保育者が担当し、学習については教員担当へ移行していく等、協働担当制が適しているのではないだろうか。

日本においてプリスクールクラスを実現するためには、制度や担当者養成等、多くの課題があるが、すべての子どもたちの幼小移行期を保証していくことは、教育問題の早期解決に繋がっていくと考えられる。さらには、様々な保育機関で学ぶ子どもたちが、ケアから学習への移行を自ら実践できるような 1 年間を保証していくことが、国民一人ひとりの自立の基盤を構築していくことに繋がっていくと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12 件）

単著

・「デンマークのフリスコーレにおけるオラリティーに関する考察―初等教育に着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第 21 号-2 、2014 年、 103-113 ページ。
・「デンマークにおける 0 学年の授業に関する一考察」『早稲田大学教育学会紀要』第 15 号、2014 年、pp.117-124。
・「デンマークにおける北欧の教育活動との連携」早稲田大学大学院教育学研究紀要第 22 号-2、2015 年、37-47。
・「グルントヴィの教育理念―生きた言葉と相互作用」早稲田大学教育学研究科比較・国際教育学論集第 2 号、2015 年、pp.23-39。
・「デンマークのフリスコーレの授業に関する一考察」早稲田大学教育学会紀要第 17 号、2016 年、pp.49-56。
・「グルントヴィの教育理念の今日的意義」『名古屋女子大学研究紀要』第 62 号、2016 年、pp.195 - 203。
・「デンマークの幼小移行期に関する研究―プリスクールクラス『0 学年』の改革に焦点を当てて」早稲田幼児教育研究所紀要第 3 号、pp. 35-50、2017 年。
「乳幼児期における歌いかけの意義―デンマークのベビー賛美歌―」名古屋女子大学研究紀要第 64 号、2018 年、pp.377-386。
・「専門性を活かしたサービス・ラーニングの指導研究―書店における学生の絵本読み聞かせ活動」名古屋女子大学研究紀要第 63 号、2017 年、pp.429-439。
・「幼児教育における言語表現活動の指導法に関する授業実践」早稲田大学教育学会紀要第 18 号、2017 年、pp. 25-32。

・「デンマークの幼小移行期『0 学年』に関する考察―言語評価プログラムに焦点を当てて―
愛知学泉大学研究紀要第 1 巻第 2 号、2019 年、pp.93～102。

共著
・松田ほなみ・児玉珠美「昔話を題材とした授業指導法の研究」名古屋女子大学研究紀要第 63 号、2017 年、pp. 419-428。
・神崎奈奈・児玉珠美「新たな時代に向けての幼児教育の方法と評価」名古屋女子大学研究紀要第 64 号、pp.361-367。

〔主な学会発表〕（計５件）
・「デンマークの 0 年生の授業に関する一考察」早稲田教育学会口頭発表、2014 年。
・「デンマークの 0 年生に関する一考察―幼小連携のモデルとしてー」2014 年。
・「デンマークの新しい教育改革に関する報告と考察―Den nye folkeskole」日本国際教育学会口頭発表、2014 年。
・「デンマークの幼小移行期としての 0 年生に関する考察」日本保育学会口頭発表、2015 年。
・「デンマークの新たな教育改革に対する教員意識についての考察―公立基礎学校におけるアンケート及びインタビュー調査を通して―」日本比較教育学会口頭発表、2016 年。
・「幼児教育における言語表現活動の指導法に関する授業実践」早稲田教育学会口頭発表、2017 年。

〔図書〕（計６件）
・内山伊知郎監修、児玉珠美・上野萌子編著『0・1・2 歳児の子育てと保育に活かすマザリーズの理論と実践』北大路書房、2015 年、ISBN978-4-7628-2891-1。
・児玉珠美『デンマークの教育を支える「声の文化」声の文化―オラリティに根差した教育理念』新評論、2016 年、ISBN978-4-7948-1053-3 。
・伊藤理恵・上野真由美・大嶽さと子・河合玲子・児玉珠美他『幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』名古屋女子大学短期大学部保育学科、2017 年、ISBN978-4-9909437-0-7。
・浅野千恵・小出あつみ・児玉珠美・小町谷寿子・三宅元子・安井健他『家庭科教員のための学習指導技術―主体的・対話的で深い学びを目指して』三恵社、2018 年、ISBN978-4-86487-768-8。
・伊藤理恵・上野真由美・大嶽さと子・河合玲子・児玉珠美他『未来を見据えた保育者を目指して』鳴海出版、2018 年、ISBN978-4-907952-17-4。
・児玉珠美「デンマークの 0 年生におけるケアから学習への移行―プリスクールクラスモデルの提案―」科研費研究成果報告書、2019 年。

〔産業財産権〕該当なし

〔その他〕該当なし

６．研究組織

(1)研究分担者
該当なし。

(2)研究協力者
研究協力者氏名：渡邉敦子　Atsuko Watanabe Bertelsen
大野睦子　Mutsko Ono Bjerresø

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。